

## マックス・ヴェーバーの呪縛 ——『倫理』論文におけるヴェーバーの魔術からの解放——

"As often happens with complicated problems, when the explanation finally was found it seemed so simple that one wonders whether it can be correct, and if so why it was not discovered long ago."  
(Max Farrand, in: "Benjamin Franklin's Memoirs")

羽 入 辰 郎

### 序——問題の所在

ことあるごとに新聞で取り上げられるのがマックス・ヴェーバーの言葉である。確かに取り上げるには恰好の言葉がヴェーバーには多い。適度に洒落っていて、しかも深遠である。しかし結局のところ、マックス・ヴェーバーとは一体何を言った人なのか？一度はヴェーバーに惹かれながらも、結局は放り投げた記憶が誰にもおありである。そこには余りにも難解で理解出来ない深遠な言葉が散りばめられており、我々凡人には結局手が出せない。そこでヴェーバー用語を専門に解釈するヴェーバー学者が登場し、訓詁学的に逐一解釈してくれることになる。しかしそれでも我々凡人には良く分からない。ヴェーバーの立論というのはえてして飛躍が多く、問題提起が大抵そのまま結論へと繋がってしまって、肝心のその間の論証部分というのは——大体が細かい活字のびっし

りとした注の部分である——不可解で分からぬままに残ってしまう。しかも、肝心のよく分からない論証部分というのは、ヴェーバー学者はえてして扱ってくれない。さて、あのヴェーバー特有の一種異様な分からなさというのはいくつから来るのであろうか？そしてそもそも、ヴェーバーの論証というのは、本当にヴェーバー学者の言っているように正しいものなのであろうか？自分の貧弱な頭では到底分からないと絶望して若い時分に放り投げた人間達の方が間違っているのではあろうか？それとも今現在も分かると称している人間達の方が間違っているのではあろうか？以上のことを確認するために、彼の名を最も有名にした論文、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』<sup>(2)</sup>を用いて、そしてその『倫理』論文の中でも最も難解とされている部分として、一つはルター「Beruf」概念<sup>(1)</sup>をめぐるあの長大な注の部分、いま一つはフランクリンの文章を素材として「資本主義の精神」の理念型を構成する部分——実はこれが「Beruf」概念<sup>(1)</sup>をめぐるあの長大な注を生じさせたそもそもの原因部分であることは、後に触れることが出来よう——、これら二箇所を選び出し、マックス・ヴェーバーの叙述の難解さの原因を探究してみることに、これが本稿の課題である。

### I 内的親和関係のパラドックス

まずBerufに関する注の部分であるが、読み手側の理解しようという意欲を殆ど沮喪させるまでのこの部分の難解さは誰しもが認めるところであろう。議論の本筋は絶えずあちこちに迂回する。そしてその周囲には、不要としか思われぬ枝葉の議論がいつも二重・三重に張り巡らされている。妻マリアンネをして「脚注の腫瘍FuBnotengeschwulst」<sup>(3)</sup>とまで嘆かせた「倫理」論文の難解にして膨大な注のうちでも最たるものがこのBerufに関する注である。これまでにこの部分が正面切つて明晰に論じられた例を、海外をも含めて筆者は寡聞にして一切聞

かぬ。さて、議論を追わねばならぬ読み手側の忍耐力を全く考慮していぬと言わざる得ぬこのように分かりにくい議論を、ヴェーバーはなぜ行ったのであろうか？なぜもつと明晰に簡潔に書けなかったのであろうか？難解極まりないヴェーバーの議論の追跡をこれから試みようとする我々の叙述自体までもが読者の忍耐を超えたものとならぬためにも、ここであらかじめ我々の戦略を手短かに示しておくことが有益であらう。結論を先取りして言うならば、マックス・ヴェーバーとは無駄な議論を全くせぬ極めて明晰かつ伶俐な男である。彼が行う一見不必要としか思えぬ不可解な議論は、彼の立論にとつては全て必要不可欠のものである。難解な議論の必要不可欠を見抜かぬ限り、即ち、難解な論理の迷路を組み上げざる得なかつたヴェーバー側の必要性を喝破せぬ限り、彼の「難解」な叙述は従つていつまでも難解のままに留まり続けることとなる。彼は何らかの必要性があつて難解に叙述したのである。しかもその場合当方の戦略にとつて更に有効なことは、彼がその際どのような手札をしか手にし得ていなかったかに注意を払うことである。限られた手札は議論の展開に対して、その苦しい台所事情には思い及ばぬ観察者の眼には不可解としか映らぬ変則的な動きを必然的なものとして強制するであらう。また、議論の前後での無理な飛躍、断定、これらもまた後段での大掛かりな迂回の必要を生じさせる。その迂回の巧みさを我々は後に知るであらう。ヴェーバーとは極めて頭の良い男である。浮かび上がってくることは結局はこれである。もつとも、そうした伶俐さを知的に誠実なことと言えるかどうかは別のことであるが、今この場ではそれは問わない。

先ず大雑把に「倫理」論文の前半部の構造を概観する。「倫理」論文の最終目標は既にその表題に明示されている。即ち、「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」、この二つのものは一見相互に水と油の如く反発し合うもの、相入れぬものと思えぬにもかかわらず、その歴史的起源にまで遡つてみれば二つは意外な「内的親和関係」にあるのであつて、近代西欧の資本主義社会を形造る上で一つの重要な契機となつた「資本主義の精神」は、現世における野放図な単なる営利衝動などから生じてきたものではなく、むしろその全くの正反対物と思えぬところの古プロテスタンティズムの禁欲的職業倫理に由来するものなのである、というのが「倫理」論文におけるヴェーバーの主張であつた。さて、「倫理」論文の「難解さ」の源は、ヴェーバーのこの主張内容そのものではなく、この主張を論証しようとした際のヴェーバーの手法にある。普通のオーソドックスな歴史叙述であれば、歴史の流れと共に過去から現在へと順々に叙述していったであらう。穩当ではあるが、それは恐らくは単調で平板な記述となる。しかもその場合、事実に関する叙述は余りにも錯綜し、「因果関係のただ一つの側面」(RS: 12)をくつきりと浮かび上がらせようなどという<sup>(6)</sup>ことは到底望み得なかつたであらう。「倫理」論文においてヴェーバーはそうした穩当なやり方を好まない。彼はもつとくつきりと水際だった方法、普通の歴史叙述とは全く異なる方法を選ぶ。歴史の流れとは逆に、現在から過去へと論証しようとするのである。即ち、フランクリンの文章から構成した「資本主義の精神」を踏み台として彼は跳躍し、時間の流れを一気に遡つて、古プロテスタンティズムにおける禁欲的職業倫理と「資本主義の精神」とのこの二つを一挙に結び付けてしまふのである。「倫理」論文前半部が読み手に与える、社会科学論文としては稀に見る鮮やかな印象の源がここにある。と同時に、「倫理」論文全構造の構造上の無理も、そしてその「難解さ」の源も、この前半部に集中する。以上のことを頭に入れた上で、前半部分におけるフランクリンからルターへの跳躍の構造をざつと概観してみよう。

彼は先ず、職業統計においてプロテスタントの方がカトリックよりも上層の職種に就いている、という事実から出發する。そしてその理由を求めると当たつて、宗教的信仰心以外のものに理由を求めようとする説明を、即ち、「その時々」の「外的な歴史的・政治的状况の内」(Archiv: 6, RS: 23; 大塚訳二五頁・梶山訳・安藤編七六頁)理由を求めようとする説明を次々と斥けてゆく。こうしてついに、一方にはプロテスタントの「非現世

的な禁欲的信仰心、他方にはやはりプロテスタントに見られる、現世における活発な資本主義的営利活動、これら殆ど水と油としか言いようのない二つのものの「全き対立は、正に一つの内的親和関係へとひっくり返され得るのではなからうか」(Archiv: 8; RS: 25f.; 大塚訳二九頁・梶山訳・安藤編八〇頁)と考える以外途はない、というところまで、換言するならば、最も相反するもの同志の間に結び付きを想定するしか方法はないというところまで、その作業を押し進めていく。そして最後にヴェーバーは次のように言う。

「従つてもしも、古プロテスタント精神」における一定の刻印」と近代の資本主義的文化との間に、内面的な親和関係が「そもそも」見出されるべきであるとすれば、我々はそれを……むしろ古プロテスタント精神の精神の純粹に宗教的な特徴の内にも否が応でも wohl oder übel 求める他ないのである。」(Archiv: 11; RS: 28; 大塚訳三三頁・梶山訳・安藤編八三頁)

勿論言うまでもなく、「否が応でも求める他ない」などと言わざる得ぬ羽目に陥つたのは、ヴェーバー自身がその説明の可能性を一切斥けたからこそである。ここでのヴェーバーは例えて言うならば、資本主義的営利活動という此岸から古プロテスタント精神という彼岸へと橋を渡そうとするに当たって、もつと川幅も狭く流れも緩やかな所(＝外的諸状況に説明を依存し得るような場所)に橋を渡す可能性を一切斥け、「もし橋が渡されるべきであるとするならばここに、ここにしかない」と言つて、橋の利用者の不便も施工業者の予算も考えず、最も川幅の広い地点をわざわざ指差している建築家のようなものである。さてここで注意すべきことは、なるほどこの建築家は他の地点に橋を渡すことが不可能であることに關しては確かに説得力を持って論証してくれたのであるが、彼の言うこの地点にそもそも橋が架け得るものなのかということに關してはまだ一言も言葉を發していぬ、ということである。即ち、ヴェーバーは、ここまでの第一章・第一節末尾に至るまでの論証において、プロテスタントがカトリックに比し何故資本主義的営利活動に携わることが多いのか、ということを他の理由付けによつ

ては十分説明付けることは出来ないということを論証したに留まり、彼の言う、内的親和関係、なるものによつて果たしてそれが説明出来るものであるのか否か、ということに關してはまだ一言も述べてはいぬのである。換言すれば、内的親和関係が存在することが必要であると主張しているに留まり、事実存在し得るか否かの論証にはまだ一歩も踏み込んでいぬのである。

ではどうやって橋を渡すか? 今ヴェーバーの目の前にあるのは「労働の精神」と呼ぶにせよ、「進歩の精神」と呼ぶにせよ、或いはこれ以外のどんな呼び方で呼ばれるにせよ、通例プロテスタント精神によつて呼び覚まされたと考えられている、そうした精神」(Archiv: 10; RS: 29; 大塚訳三三頁・梶山訳・安藤編八三頁)のみである。これを手掛りとして古プロテスタント精神へと遡つていくしかないのである。

## II 「資本主義の精神」

第二節に入るや否や、この建築家はやおら彼の指示したこの岸辺に足場を組み始める。これが「資本主義の精神」である。足場の素材はフランクリンの二つの文章、「若き職人への助言」と「富まんとする者への指針」である。「時は金なり……」というあの有名なフレーズは前者に含まれている。さて、この建築家はなかなか神経質である。彼は自分の技量の程を示すために、これから組まれるべき足場が対岸から完璧に離れていることを要求する。換言するならば、「資本主義の精神」の理念型は、そこから一切の宗教性が曇なく除去されている形で構成されていなければならぬ、と言う。

「我々はこの目的のために」(＝「資本主義の精神」という対象を差し当たり暫定的に例示するために)、くだんの「精神」に關する或る一つの記録に頼ることにしよう。その記録は、ここで差し当たつて問題になるところ

のものを殆ど古典的な純粹さで含んでおり、「しかも同時に、宗教的なものへの直接的な関係を全く失っており von aller direkten Beziehung zum Religiösen losgelöst」それ故——我々の主題にとって——「無前提的」であるという長所を示してくれてゐるのである。】(Archiv: 12f.; RS: 31; 大塚訳四〇頁; 梶山訳・安藤編八九頁)

この言葉と共に引用されるのが前述のフランクリンの二つの文章である。即ちヴェーバーは、「資本主義の精神」の理念型を構成するに当たって、その理念型構成のための素材として今から用いようとするフランクリンの文章が「宗教的なものへの直接的な関係を全く失って」いることをここで要求するのである。「全く」に付されている強調はヴェーバー自身によるものである。また、前掲引用文中の「しかも同時に」以降の、フランクリンの二つの文章が宗教的なものへの直接的な関係を一切失っており、それ故「無前提的」であるという長所を示してくれている、という部分は「倫理」論文が『宗教社会学論集』に収められるために一九一九年から一九二〇年にかけて改訂された際にヴェーバー自身によって加筆された文章である。「倫理」論文が最初に発表された(一九〇四/〇五年)後、ヴェーバーは手ひどい論争に巻き込まれた。『宗教社会学論集』に収められた際に付された「倫理」論文冒頭の注におけるヴェーバー自身の言葉によれば、改訂に際しての加筆は何よりもそうした不毛な論争を避けるためのものであり、それによって「考え得る限りのあらゆる誤解を将来に渡って防ぐ」と努めた(PS: 16; 大塚訳二二頁; 梶山訳・安藤編六五頁)というものであった。従って我々はヴェーバーによってわざわざ行われたこの部分の加筆の持つ意味をここで十分に考えてみる必要がある。この部分の加筆は、恐らくは次のような外れな非難を前もって防ぐためのものであったと考えられる。即ちヴェーバーは、あらかじめプロテスタンティズムの色彩を帯びた資料を意図的に選択していたのであり、それを素材として理念型を構成し、然る後にその理念型を足掛かりとして古プロテスタンティズムへと遡って見せてくれただけなのであって、プロテ

スタンティズムの色彩を帯びた資料から構成したところのプロテスタンティズム的なものをあらかじめ内に含んだ「資本主義の精神」と、古プロテスタンティズムとの間に、内的親和関係<sup>(6)</sup>が存在すると論証されたところでそれは当たり前の話でパラドックスを解いたことには何もならぬ。「資本主義の精神」という理念型を構成した際に既にプロテスタンティズム的なものを含み込ませていたのであり、「それは証明しようとするものが、概念を把握すると必然的に与えられているというやり方で概念を把握することである。人はこれを不当前提 *positio principii* と呼ぶ」と<sup>(7)</sup>。

フランクリンの文章が宗教的なものを全く含んでいなかった以上、言うまでもなくブレンターノ的なこうした非難は成り立たない。プロテスタントの非現世的禁欲的信仰心<sup>(8)</sup>と、貨幣の獲得のみを現世において自己目的的に指向する「資本主義の精神」<sup>(9)</sup>というこれら二つのもののパラドックス性を際立たせ、然る後にこれら二つのものを結び付けて見せようという「倫理」論文の出発点からの論証の方向からしても、理念型構成の素材としてこれから用いようというフランクリンの文章の内に宗教性の残滓が残りにくく払拭されていることをここで確認しておくことは、確かにヴェーバーにとっては必要な手続きであったのであろう。「倫理」論文は下手をすると、何を論証したのか判らぬトートロジー(同語反復)の論文という非難を浴びせられかねぬ構造を持っており、そのため、この辺りの確認はヴェーバーは実に神経質におこなう。

さて、従って現行「大塚訳」に付けられている「訳者解説」の次の部分は、ここでのヴェーバーの立場からするならば、誤読——それも「倫理」論文の全構造を揺るがしかねぬ極めて危険な誤読——であることになる。大塚久雄は「訳者解説」に次のような文章を書いてしまっているからである。

「フランクリンの思想は、内容的にはまだまだビュウリタニズムないしカルヴィニズムの思想的残存物がいっぱいいつまっています。しかし、形の上ではもう宗教から解放されはじめています。ちょうどそうした境目に位置

している。ですから、そうした短文は、問題をさらに深く追求していくため格好な材料だと思います。」(大塚訳 三八六頁)

ヴェーバーが「宗教的なものへの直接的な関係を全く失っており、それ故——我々の主題にとって——『無前提的』であるという長所を示してくれているのである」と言い切ったフランクリンの同じ文章を、大塚は「まだまだビュリタニズムないしカルヴィニズムの思想的残存物がいつばいつまって」おり、「ちょうどそうした境目に位置している」「格好な材料」なのであり、だからこそヴェーバーは引用したのである、と述べてしまったのである。従って、ヴェーバー解釈としては大塚久雄の「訳者解説」のこの部分は間違いだということになる。しかし、大塚ほどの人物が、こんな基本的部分でそんなに簡単な間違いを犯すものであろうか？ 誤読には常に正読への鍵が隠されている。ましてや、大塚ほどの人間の誤読であるならば、これは十分探究してみる価値のある誤読、と考えざる得ない。従って問題はむしろ、如何なる理由から大塚はこのような誤解をしたのか、ということになる。仮に大塚がヴェーバー解釈としては確かにこの部分で間違いを犯していたとしても、ではしかしその間違いはどこから、そして誰から由来したのか、ということである。結論を先取りして述べてしまふならば、ヴェーバー本人から由来しているのである。確かにヴェーバー解釈としては大塚のこの部分の解説は、誤読なのであるが、しかし実は大塚久雄に責任のある誤読ではないのである。それどころか、むしろ大塚久雄は正しかったのである。そのことを我々は本稿の末尾で触れることが出来よう。

さて、最後にこのヴェーバーによるフランクリンの文章の非宗教性の「確認」が「倫理」論文の全構成にとつてどのような重要な意味を持っていたかを確認して、この部分を後にしよう。そのことを語ってくれるのが、「倫理」論文結末近くにおける、論証の全行程を振り返ったヴェーバー自身による次の言葉である。

「読者はここで今一度、この論文の冒頭で引用したフランクリンの文章を読み返して頂きたい。そうすればそこで『資本主義の精神』と名付けられたあの心情の本質的要素は、我々が先にビュリタンの職業的禁欲の内容として確定したものと正に同じものであつて、ただ宗教的基礎付けを欠いているだけであり、そして『正に』フランクリンの場合にはそうした宗教的基礎付けは既に死に絶えてしまつていた。Archiv: いる。のである、ということをお分かつて頂けるであろう。」(Archiv Bd. 21: 107; RS: 203; 大塚訳 三六四頁; 梶山訳・安藤編 三五五頁。傍点引用者)

フランクリンの場合が「宗教的基礎付けを欠いている」ことは、ここでは論理的要請ですらある。なぜなら、宗教的基礎付けを今では欠いてしまつてしまつている禁欲的職業倫理、「資本主義の精神」が、宗教的基礎付けを有していた禁欲的職業倫理、「ビュリタンの職業的禁欲」から由来したことを論証することにこそ「倫理」論文の意義は存するのであり、もしも仮に宗教的基礎付けを欠くというこの要請を「資本主義の精神」が満たさぬとするならば、その時「倫理」論文は「同じもの」から「正に同じもの」が生じてきたことを論証したに過ぎぬ同語反復の論文となつてしまふであろうからである。先にトートロジーとなりかねぬ、と述べたのはこの意味においてである。

いずれにせよここまでのヴェーバーの叙述によって得られたものは、「宗教的なものへの直接的な関係を全く失つて」いる記録を素材として造り上げたところの「資本主義の精神」であり、「宗教的基礎付けが既に死に絶えてしまつてしまつている」ものとしての「資本主義の精神」であつた。改訂前の「倫理」論文でのヴェーバーの定義に従つて今それを引用しておけば、「自分の財産を大きくすることへの関心が自己目的として前提されていて、この関心に対して各人は義務がある、という思想」(Archiv: 14)である。更に念のために述べておけば、ここで注意すべきは、この段階での「資本主義の精神」の叙述では、自己の資本を増殖させることは、自己目的化された義務、とは見做されてはいるものの、いまだ、職業義務、とは見做されていぬ、ということである。前述のフ

ランクリンの二つの文章中には、「職業義務」とか、「職業労働への献身」といった類いの記述は一切見当たらず、この段階では当然のことである。「職業義務観念」が「資本主義の精神」の内に挿入されるのは、もつと後の段階である。

さて、宗教性に戻ろう。ここで容易に予測がつくことは、「資本主義の精神」を非宗教性という点に関して純化すればする程、今度はそれを足場として古プロテスタンティズムへと遡ることはますます至難のこととなってくる、ということである。全く宗教性を欠いたものから宗教的なものへと移行することは出来ない。即ち、「資本主義の精神」を非宗教的なものへとよいよ純化させ、古プロテスタンティズムの宗教的信仰とそれとのパラドックスをことさらに際立たせようというヴェーバーのここでの行為は、「資本主義の精神」を足掛かりとして古プロテスタンティズムへと遡らねばならないという彼の「倫理」論文における課題とは全く相反することなのであり、彼は実はここで自分で自分の首を絞めているに等しいのである。ではヴェーバーはこいつやっつて古プロテスタンティズムへの移行を試みるのか？

### Ⅲ ルターへの廻行

先ず橋を対岸（古プロテスタンティズム）に渡す直前のヴェーバーの文章を見てしまおう。第二節末尾においてヴェーバーは次のように言う。

「…我々が正に究明しなければならぬのは、あの『天職』思想、Berufs-Gedanke がそこから生まれ、また、過去及び現在における我々の資本主義的文化の最も特徴的な構成要素の一つであるところのあの——既に見たように、純粹に幸福主義的な自己利益の立場から見ればはなはだ非合理的なArchiv: 非合理的な——職業労働への献身Sichhingeben an die Berufsarbeitがそこから生まれたところの『合理的』思考と生活の具体的形態は、いかなる精神の子であったのか、ということなのである。ここでの我々の関心は正に、全ての『天職』概念、Berufs-Begriff の内にあると同様、この内にも存在する非合理的要素がどこから由来したのか、ということへと向かう。」(Archiv: 35; RS: 62; 大塚訳九四頁；梶山訳・安藤編一三三—一三三頁)

『天職』思想と非合理的な職業労働への献身がそこから生まれたところの『合理的』思考と生活の具体的形態は、いかなる精神の子であったのか、そして、Beruf: 概念の内存在する非合理的要素はどこから来たのか、というこの問いに対してすぐ次の第三節冒頭においてヴェーバーは次のように答える。ルターからである、と。

「さて紛れもなく明白なことは、ドイツ語のBerufという語の内に既に、また英語のcallingの場合には恐らく一層明瞭に——神からArchiv: 神から与えられた使命という——或る宗教的観念が少なくとも共に響いているということであり…[また]更に明らかにすることは…今日の意味でのこの語は、聖書の翻訳に、それも原典の精神ではなく、翻訳者達の精神に由来しているということである。」(Archiv: 35ff.; RS: 63ff.; 大塚訳九五頁；梶山訳・安藤編一三三—一三四頁)

ヴェーバーはここでは「翻訳者達の精神」(傍点引用者)と述べているのであるが、このすぐ次に続く部分での彼の叙述、及びその部分に付された注(これがBerufに関する例の長大な注である)から直ちに分かるように、彼がここで重視しているのは実はマルティン・ルターただ一人である。

さて、これが架橋の瞬間である。Berufというこの語の語源を尋ねることによって、ヴェーバーはやすやすと宗教改革の父ルターへと到達し得たのである。ひとたびルターに辿り着いてしまえば、そこからカルヴィニズムや他のプロテスタント諸派へと叙述を横滑りさせることはもはやたやすい。ではBerufというこの語をヴェーバーは一体どこから引き出したのか？ フランクリンからである。「天職」思想、とか、資本主義的文化の最も

特徴的な構成要素の一つであるところの非合理的な職業労働への献身、等といった先程ヴェーバーが述べていたもの、即ち、一番最初にフランクリンの二つの文章から「資本主義の精神」を構成した際にはそこには含まれていなかった筈のもの、これらもやはりフランクリンから引き出したのである。「倫理」論文において、Bert<sup>11</sup>という語が初出するのは以下の部分においてである。

「しかしまた同時にそれ〔＝資本主義のライト・モチーフであるところの無意味な倒錯〕は、一定の宗教的〈Archiv: 宗教的〉観念に密接に関連した一連の感情を含んでいる。というのは、何故「人から金を作ら」ねばならないのか、と人からもしも問われるならばベンジャミン・フランクリンは、彼自身ほどの教派にも属さない理神論者であったにもかかわらず、彼が言うには、厳格なカルヴィニストであった彼の父が彼の少年時代に繰り返し教え込んだという聖書の句を引いて、自伝の中で次のように答えるのである。「汝、その業に *in seipsum* Bert<sup>12</sup> 巧みなる人を見るか、かかる人は王の前に立たん。」(Archiv: 17:RS: 36; 大塚訳四八頁; 梶山訳・安藤編九五頁)

何故人から金を作らねばならぬのか、なぜ人は絶えず金儲けをしなければならぬのか、ともしも問われるならば、即ち、近代資本主義に特有のこの非合理的な倒錯、の根拠を問われるとするならば、フランクリンは厳格なカルヴィニストであった彼の父から自分が少年時代を通じて繰り返し教え込まれた聖書の句をもって答えるのであり、そこには、Bert<sup>13</sup> という語が含まれていた、という構図である。そしてこれに続けてヴェーバーは更に次のように言う。「貨幣の獲得は…職業 Bert<sup>14</sup>における有能さの成果であり表れなのであって、こうした有能さが…フランクリンの道徳の実際のアルファでありオメガなのであり」(Archiv: 17: RS: 36; 大塚訳四八頁; 梶山訳・安藤編九五頁)、そして「己の『職業的』活動の内容」に対して、たとえそれがどのようなものであれ、各人はそれに対して義務を感じるべきなのである、というこうした「職業義務の思想」こそが「資本主義文化の『社会

倫理』」にとって特徴的なものであり、否、それどころか或る意味ではそれにとって構成的な意味を持つていたのである」(Archiv: 17: RS: 36; 大塚訳五〇頁; 梶山訳・安藤編九七頁)と。

さて、ここでヴェーバーが行っている操作は次のようなことである。フランクリンの「自伝」の一節の Bert<sup>15</sup> という言葉に目を付け、Bert<sup>16</sup> における有能さこそがフランクリンの道徳の真髄なのであると断じ、そして「己の職業に対してのこうした義務観念こそが資本主義文化の『社会倫理』」にとって特徴的なもの、否、それどころか構成的な意味をすら持つものであると述べてしまうことによつて、彼はこの部分で「資本主義の精神」の内に「職業義務の思想」をその不可欠な構成要素として、即ち、「過去及び現在における我々の資本主義的文化の最も特徴的な構成要素の一つ」であるところのものとして含み込ませることに見事成功したのである。以後彼は、直接に「資本主義の精神」の起源を求めずとも、「職業義務の思想」の起源を求めることによつて、「資本主義の精神」の由来を間接に尋ねることが出来ることとなる。これが先程の二節末尾における Bert<sup>17</sup> 概念の由来を尋ねる文章へと繋がる。即ち、ヴェーバーは、一方ではフランクリンの二つの文章から「資本主義の精神」の理念型を形造り、他方では彼の「自伝」の一節から Bert<sup>18</sup> という語を引き出し、同時にその一節を巧みに用いて「資本主義の精神」の内に「職業義務の思想」をその不可欠の構成要素として含み込ませることで、今や「資本主義の精神」ではなく「職業義務の思想」の起源をこの Bert<sup>19</sup> という語の語源を辿ることだけで求め得たのである。つまり、彼は Bert<sup>20</sup> という言葉をジャンピング・ボードとして一足飛びに古プロテスタントイズムへと跳躍し得たのである。従つて、先に引用した Bert<sup>21</sup> という語を含むフランクリンの「自伝」からの引用部分こそが、ヴェーバーの架橋作業のアルファでありオメガなのである。しかしながらヴェーバーのアポリアもまたこの「自伝」からの引用部分に存する。我々は漸くここで我々の本題に到達したのである。

## IV ヴェーバーのアポリア

我々にとつての本題に入る前に、明敏な読者から或いは次のような異議を受けるかもしれない。

—— ちょっと待ってくれ。君の説明は最後のところで少しおかしくないか？ 君は先程、ヴェーバーはフランクリンの二つの文章から「資本主義の精神」の理念型を構成するに当たって、それらの文章が「宗教的なものへの直接的な関係を全く失っている」ことを確認している、と述べていたではないか。それだけ神経質に確認しておきながら、今になってフランクリンの「自伝」を繕いて聖書の引用句を見つけ出し、それに乗っかってルターへと遡るといふのはいささか虫が良すぎるのではなからうか？ 聖書からの引用という以上、それは宗教的なものへの直接的な言及と見做すべきであろう。事実ヴェーバーは、「自伝」における聖書からの引用句に触れるに当たって「しかしまた同時にそれは、一定の宗教的（Archiv: 宗教的）観念に密接に関連した一連の感情を含んでいる」と言わざるを得ぬ羽目に陥っている。要するに、宗教的感情をフランクリンの内に今になって発見したということであろう。しかしそれもまたおかしい話である。実際はヴェーバーは「自伝」のこの部分を前もって読んでいたからこそ、「資本主義の精神」の理念型構成の素材としてフランクリンを選んだのであろう。そして「自伝」のこの部分を頭に入れておきながら、それは手元に隠して知らぬ振りをしておき、読者には宗教的言及を一切含んでいぬ最初の二つの文章のみを見せながら、非宗教的なものとして「資本主義の精神」の理念型を一旦構成して見せたのである。但し勿論彼は、後で「自伝」にまで資料の範囲を広げた時点でこの聖書の句を引っぱってきて、それを踏み台にルターへと遡ることは先刻承知の上だったのである。つまり結局はヴェーバーは、前もって「自伝」のこの部分を読んでいて、ルターに遡るのに好都合だと思つたからこそ、「資本主義の精

神」の理念型構成の素材としてフランクリンを選んだのである。フランクリンがヴェーバーの言うように「厳格なカルヴィニストであつた父親」から聖書の句を叩き込まれて育つたとするならば、その息子が唱えた「啓蒙の哲学」(Archiv: 14: Rs: 33: 大塚訳四三頁、梶山訳・安藤編九二頁)の内に「一定の宗教的観念に密接に関連した二連の感情」が見出されるのもこれまた当たり前の話であつて、だとするならば「倫理」論文というのは「厳格なカルヴィニスト」の息子からカルヴィニズムへと遡るだけのたわいもないお話ということになつてしまおう。しかも「資本主義の精神」の内に、そのそもその最初から宗教性の残滓が含まれていたことを、理念型構成の最初の段階から踏まえておくならまだしも、今の段階になつて事新しく発見したかのように言い出すのもおかしな話である。ここでヴェーバーが持ち出している議論は、非宗教的資料から構成した筈の「資本主義の精神」ではあつたのだが、中を割つてみれば、その非合理的信念の核心部分には宗教的感情、それも「厳格な」カルヴィニズムに由来する一連の宗教的感情が隠れていたではないか、ではその由来を尋ねてみよう、との構図のようであるが、これは要するに、当初「資本主義の精神」の理念型を構成するに当たつて、「自伝」には故意に手を触れずに、宗教的なものへの直接的言及を欠く二つの文章のみに素材を絞り、宗教性を欠いたものとして「資本主義の精神」の理念型をとにかく一旦形造つてしまつたからこそ成り立つ話であつて、実際はヴェーバーは「資本主義の精神」の内に「一定の宗教的観念に密接に関連した一連の感情」が、即ち宗教的感情が隠れていたことを最初から知つていたのである。よつてヴェーバーの「資本主義の精神」とは、「資本主義の精神」という概念の把握と共に、これから証明しようとするもの、即ちプロテスタント的宗教感情を含んだ職業倫理が必然的に与えられてしまふ類いの概念なのであつて、宗教性という点に関して「不当前提」なのである。或いは君は更に次のようにヴェーバーのことを弁護しようと思ふかも知れない。理念型を構成するに当たつて、限定された資料のみを素材とし、他の資料には敢えて手を触れずに、それだけ一面的に鋭く理念型を先ず構成してしまふ



ということは理念型構成の手続きとしては許されるものなのである、と。要はその後、資料の範囲を拡大してゆく段階で、ひとたび形造った理念型と「事実」とがどの点で合致し、どの点で合致せぬかを検証することによって結果として現実を浮き彫りにすることが出来れば良いのである。理念型は決して実体化さるべきものではなく、むしろ現実を測るための物差しとして役立てるべきなのである。事実ヴェーバーはフランクリンの「功利的傾向」に關してはそうした検証を行っていないではないか、と。しかしながら君の弁護に對しては君の弁護自体を用いて次のように反論することが出来よう。なるほど君の言う通り、限られた資料のみに基づいて理念型をそれだけ一面的に鋭く一先ず構成してしまふというこの操作自体は、理念型構成の手續きとしては確かに許されるものである。しかしながらその場合、もしも理念型を実体化することなく飽くまでも現実を測定するための物差しとして、つまり「個々の場合に現実がこの理念像にどの程度近くどの程度遠いかを確定する」(W.L.: 191) ための道具として飽くまで用いたいと言うのであれば、人は少なくともその理念型を構成する際に留意した特定の観点に關して、即ち、今のヴェーバーの「資本主義の精神」の場合に即して言うならば、「資本主義の精神」の理念型を構成する際に留意した倫理性と非宗教性というこの少なくとも二つの観点に關しては、一旦構成したその理念型がそれらの観点に關して妥当なものであるか否かを、資料の範囲を拡げてゆくその都度チェックしてゆかねばならぬのである。君はヴェーバーはフランクリンの「功利的傾向」に關して——確かにこれは倫理性という観点から見てレレヴァントなものであり、検討せざる得ぬものである——そうしたチェックを行っている、と述べたが、實際はヴェーバーはフランクリンの「功利的傾向」を結論的には単に否認しているに過ぎず、「事実」の方を重視し必要とあらば「資本主義の精神」の理念型の方を修正しようなどという氣構えはそこには残念ながら見当たらないのである。それどころか「功利的傾向」を否認しようと焦る余り、フランクリンの「自伝」における「啓示 Revelation」という語のコンテキストを読み誤るといふ錯誤までも彼は犯しているのである。<sup>(13)</sup> 同様な強引さは非

宗教性に関しても見られる。ヴェーバーは「自伝」でフランクリン自身による聖書への言及を発見した時点で、自らが構成した理念型とフランクリンの宗教性に関する「事実」とが相応しなかつたことをむしろ認めるべきであつたのである。即ち、その時フランクリンは「非宗教性」という点に關して十分に「資本主義の精神的」ではなかつたことが証明された筈なのである。方法論でのヴェーバーの言い回しを借用するならば、もしも「資本主義の精神」という理念型が「正しく」構成されていて、しかも「自伝」におけるフランクリンの叙述の経過が理念型におけるそれと合致しないとすれば、それによつて正に「非宗教性」という或る特定の關係においてフランクリンは厳密には「資本主義の精神的」ではなかつたという証明がなされた筈だったのである。そしてその場合「資本主義の精神」という理念型は、フランクリンにおける「資本主義の精神的」ではない部分をその特性と歴史的意義において把握し得る途へと導いてくれる筈だったのである。即ち、その時「資本主義の精神」の理念型は、自らの非現実性を明らかにすることによつて、己の論理的目的を果たしたことになるのである。つまりヴェーバーは、フランクリンは「非宗教性」という観点から見てまだ十分には「資本主義の精神的」ではなかつた、という結論を下すべきだつたのである。<sup>(14)</sup>

右のようにもしも読者から指摘された場合、どう対処すべきなのか、実を言うと我々にはよく分からない。我々の側で今のところ思い付き得るのは、「一定の宗教的觀念に密接に關連した一連の感情」というこのヴェーバーによつて用いられた、やや持つて回つた「難解」な表現に着目し、これを用いて弁護を組み立てるといふことのみである。言うまでもなく、この表現がこうした批判を予想してのヴェーバー自身による故意の「難解」な表現であつたか否かということは我々には分からない。我々が言い得るのはただ、我々から見た場合、この表現はこうした批判に對して言い逃れをしやすい格好の表現であるように思えた、ということだけである。我々とはにか

我々の反論は従つて次のようなものとなる。「一定の宗教的観念に密接に関連した一連の感情」は、「一定の宗教的観念に密接に関連した一連の宗教的感情」ではない、と。このことを見落とすと、ここでのヴェーバーの苦心の表現の意味が判らぬこととなる、と。即ち、ここでヴェーバーはこの「一連の感情」自体が宗教的なものであるとは一言も言っていないのである。確かにこの「一連の感情」は「一定の宗教的観念に密接に関連した」ものである。しかしだからと言って、この「一連の感情」自体もまた宗教的なものであるとは限らぬのである。換言するならば、宗教的なものに関連しているからといって、関連している当のものも宗教的なものでなければならぬ、などということはないのである。この「一連の感情」自体は非宗教的なものである。或いはヴェーバーの意図を汲んでより正確に表現するならば、もはや宗教的では全くないものである。「自伝」の内に見出されたものがそれ自体としては宗教的なものではなかった以上、「資本主義の精神」の内この段階で宗教的なものを含まねばならぬことにはならぬ。よつて批判は当たらぬ、と。

言うまでもなく、こうした反論がいささか詭弁じみて響くことは我々もよく承知している。また、この点に関してはフィッシャー(Fischer)やラッハフール(Rachfal)との論争でも話題とはならなかったため、ヴェーバー自身がどう答えるつもりであったかを知りたことも我々には出来ない。むしろ我々は確たる答を最終的には見出し得ないこの問題にはここではこれ以上深入りしたくないことを、またその必要も余り認めぬということを正直に告白しようと思う。なぜなら宗教性に関してそれ以上に致命的なことをヴェーバーは既に行つてしまつてゐるからである。しかしそれに触れるためには、先ず、Beruf<sup>15</sup>に関する注を片付けねばならぬ。フランクリンの「自伝」における聖書からの引用部分、即ち、「箴言」22:29である。

さて、先程引用したフランクリンの「自伝」からの引用部分に、次のような奇妙な短い注が付けられている。従来余り注目されてこなかったものであるが、<sup>(15)</sup>しかし重要なものである。

「箴言」22:29。ルターは „in seinem Geschäft“ と訳している。古く英訳聖書は „business“。これについては六三頁・注1を参照せよ。〈 Archiv: くれにひびくは後述。〉 (Archiv: 17, Ann. 1; RS: 36, Ann. 1; 大塚訳五〇頁・注5; 梶山訳・安藤編九七頁・注4)

「六三頁・注1」というのがあの、Beruf<sup>15</sup>に関する長大な注を指していることは頁を繰ってみると分かる。従つてこの短い注は、あの長大な注を予告している注であることになる。つまり、前述のフランクリンの「自伝」からの引用部分とあの、Beruf<sup>15</sup>に関する注とはこの短い注を介して相互に論理的に繋がつてゐるのである。何故繋がつてゐるかと言へば、あの長大かつ、難解な注をヴェーバーが書かざる得なかつた、その原因となる事態がこの短い注の内に含まれてゐるからである。ではそれはどういう事態なのか？ 先ず、「ルターは „in seinem Geschäft“ と訳している」というヴェーバーの言葉であるが、この言葉は一体何のことを言つてゐるのであるか？ それは、ヴェーバーがそこから「倫理」論文にとつての鍵概念であるところの、Beruf<sup>15</sup>とどう語を引き出した「箴言」22:29を、肝心のルターは、Beruf<sup>15</sup>ではなく、Geschäft<sup>15</sup>とどう語によつて訳してゐた、Beruf<sup>15</sup>という言葉は使つていなかったとどういふことを述べてゐるのである。では、この「箴言」22:29における「その業において」というフレーズを、Beruf<sup>15</sup>という言葉によつて訳したのは一体誰なのであるか？ ヴェーバーである。ヴェーバー自身が、ルターはこの部分を、Beruf<sup>15</sup>とは訳さなかつたにもかかわらず、それを、Beruf<sup>15</sup>と訳して引用し、そして然る後にルターの「Beruf<sup>15</sup>概念」へと遡つたのである。さて、ここで何かキツネに化かされたような奇妙な感じを抱くのは我々だけなのであるか？ 今一度順序立てて整理してみよう。

フランクリンはアメリカ人であるので「自伝」は英語で書かれてゐる。フランクリン自身はこの部分を “in his Calling” と引用した。それをヴェーバーは、 „in seinem Beruf” と独訳して引用した。英語の “calling” は独語の „Beruf<sup>15</sup>” に相当する語であり、この翻訳自体は適訳である。ところが肝心のルターがこの部分を „Be-

ruft"とは訳さなかつた。ルター聖書では "in seinem Geschäfte" と訳されている。同様に古い英訳聖書でもこの部分は "calling" によつてではなく "business" によつて訳されている。結局この事態は、フランクリンが通常の英訳聖書での言い回しとは全く異なる "calling" という語によつて「自伝」における聖書の引用句を記したこと、そして通常の聖書の表現からはややすれたその語を足掛かりとしてヴェーバーがルターへと遡ろうとしたことから生じた事態である、と言える。そして更にこの事態はヴェーバーをして次のような厄介な状況へと陥らせることとなる。フランクリンの「自伝」の一節からなるほど独語 *Beruf* へと移行することは出来る。しかしその聖書からの引用句「箴言」22:29をルターは *Beruf* とは訳していなかつた以上、そこからルターの *Beruf* 概念へと直接に遡ることは出来ない。*Beruf* に関する注の内でヴェーバー自身が認めているように、*Geschäft* という語も *business* という語も共に、*Beruf* とは異なり、神からの召命としての職業、といったプロテスタントイイズムの宗教的色彩を一切含んではいぬ言葉である。フランクリンが「自伝」で引用した「箴言」の一節から、ルターにおける *Geschäft* という全く宗教性を帯びていぬ、ただ単に世俗的職業を意味するに過ぎぬ言葉へと遡ることは出来ても、ルターの聖書翻訳によって創造された *Beruf* という、世俗的職業を指すと共に、神から与えられた使命、という宗教的含意をも含み込んだあのプロテスタントイイズムに特有の概念へと遡ることは、従つてこのままでは不可能であることになる。

以上がこの短い注の内に含まれているアポリアである。このアポリアの意味をヴェーバーは「倫理」論文中において自分では説明しなかつた。そしてこのアポリアを回避するためにこそあの長大な注は書かれた。ヴェーバー側のこうした事情が飲み込めてくるならば、あの注の持つて回つた、難解な論理構造を捉えることもはやさほど難しいことではなくなつてくる。「箴言」22:29をルターが *Geschäft* と訳していたという事態を如何にして大したことはないことに切り下げてしまふか、このことにこそあの長大な注の狙いはある。そしてこのことに着目してヴェーバーの煩雑な論証を整理してしまふならば、論点としては次のような簡単な構造をしていることが分かる。

「箴言」22:29の翻訳はルターの信仰がまださほど深まっていぬ時期のものであつた。だから訳語がまだ *Geschäft* であつたのである。それに対し信仰が深まつた時期に属する「ベン・シラの知恵」11:20、21の翻訳ではルターは *Beruf* を用いている。従つて前者を重く見る必要はないのである。ここで暗示されているのは更に次のような理由付けである。もしも「箴言」22:29を信仰の深まつた時期のルターが訳したとするならば、きっとルターは「ベン・シラの知恵」11:20、21と同じくそれをも *Beruf* と訳したのであろう。即ち、本来「箴言」22:29はむしろ *Beruf* と訳されるべきものだったのである。だからこの部分が *Geschäft* と訳されていたことを気にする必要はないのである、と。

そして右の理由付けの論拠として更にヴェーバーが持ち出すのが「コリントI」7:20と「ベン・シラの知恵」11:20、21との影響関係に依拠した、言わば何故ルターが *Beruf* という語を生み出すに至つたかという縁起話である。この原因譚は次のような構造をしている。*Beruf* という語は元來は「神によつて永遠の救いに召される」という「純粹に宗教的な概念」だけに用いられる筈の訳語であつた。ところがルターはそれを純粹に世俗的な「職業」の意味をしか持つていぬ「ベン・シラの知恵」11:20、21のギリシア語を訳す際にも用いてしまった。その結果、世俗的「職業」を指すと同時に、神からの召命、という宗教的意味をも含んだ語 *Beruf* が生じた。換言するならば、元來は片方の意味しか持たなかつた語を別の意味の語の訳語としてルターが被せてしまったために二つの意味を合わせ持つ語が生じてきてしまった、ということである。ではなぜルターはこのような奇妙な翻訳を行ったのであろうか？ ヴェーバーはその原因を次のように説明する。ルターは「コリントI」7:20の「各々は自分が召されたところの召されることに留まっていなさい」における「召されること」を意味するギリ

シマ語 *κατατος* を独語 *Beruf* で訳した。この節のギリシア語原典は、直訳するならば「各々は（彼がそれによって）召されたところの召されることに、その状態に留まれ」であり、従ってこの「召されること」は構文上、状態・身分の意味を含んでくる。身分の意味を含んでおり、従って純粹に宗教的意味からは既に微妙にずれていたこの *κατατος* を *Beruf* と訳したことに引きずられ、ルターは「ベン・シラの知恵」11:20、21を訳す際、二二節の「各々は自分の仕事に留まりなさい」という言い回しが「コリントI」7:20のそれと似ていたことから、二二節の本来は単に「労苦」を意味するに過ぎぬ *κοπος* を *Beruf* で訳してしまつた。（但しヴェーバーは二〇節の *εργον* をルターがなせ *Beruf* で訳してしまつたのかを説明することには成功していない。）こうして世俗的「労働」の意味に宗教的含意が重ね合わされた特殊な語 *Beruf* が誕生した。以上が *Beruf* を巡るヴェーバーの議論の大筋である。では検証に入ろう。

## V 結論

「倫理」論文が発表されてから既に百年近い歳月が流れた。そしてその百年間、この *Beruf* を巡る注は、誰からも、そして一度たりとも、厳密には調べられてはこなかった。それは、厳密に調べると大変なことになるのでは、と研究者側に不安を抱かせ、厄介だな、と尻込みさせ、そしてまさかヴェーバーは変なことはいまい、理解は出来ぬもの信じよう、「問題はなほなさそうだが」が「歴史の大筋としてはおそらく間違いないところでしょう」（「訳者解説」大塚訳 三九七頁）と読み手を自信喪失させることによって盲信させる、そうした自らを守るためには極めて効果的な「難解さ」であり続けてきたのである。右の大塚の言葉が示す独特の曖昧さは、「難解さ」というものが研究者側にどのような心理的效果を及ぼすものであるかをよく物語つてくれているもの

と言えよう。しかしながら *Beruf* を巡るヴェーバーの主張は全く成り立たない。そしてそのことは実は簡単に分かることなのである。

*Beruf* を巡る注の内に次のような奇妙な記載が一箇所存在する。「コリントI」7:14から24までを順次引用する直前の記述である。

「ルター訳聖書（現代の普通の版における）では Bei Luther (in den üblichen modernen Ausgaben) の箇所（＝「コリントI」7:20のこと）が位置している全連関は以下の通りである。第一コリント7:17:」（Archiv: 39, FS:67, 大塚訳 一〇四頁、梶山訳・安藤編一四一頁。傍点及びイタリックは引用者。）

ヴェーバー自身によって括弧に入れられ、そして我々が傍点を付した右の部分は一体何を意味するのであるか？それが意味していることは次のようなことである。ヴェーバーがここで参照しているルター聖書は本物のルター聖書ではない、と。或いはより正確に述べるならば、ルター自身によるルター聖書ではなく、ルターの死後度重なる改訂を経た末の、一九〇四年当時の「現代」において普及していた「普通の版」におけるいわゆるルター訳聖書である、と。綴り・語順・句読法すらも現代化されたそうした。現代の普通の版におけるルター訳聖書を典拠として、「コリントI」7:20における *Beruf* という訳語をルターのものとしてヴェーバーは引いてきたのである。もしも興味を抱かれる読者がおられたら、ヴァイマル版ルター全集・第三部ドイツ語聖書・第七巻・一〇四―一〇五頁を開けて頂ければ幸いである。左頁（一〇四頁）にはルターの最初の新約聖書（一五二二年のいわゆる「九月聖書」）が、右頁（一〇五頁）にはルターの死の同年発刊されルター自身の手による最後の修正を含んだ版、即ち、ルター自身によるルター聖書の最終版と見做し得る一五四六年版が載っている。そして左頁下段にはその間に異同があったか否かを示す脚注が載っている。異同はない。読者はルターが「コリントI」7:20を *Beruf* と訳したことは一度もなかったことを確認するであろう。最初から最後までその箇所は

“ruff”であり続けた。従つて、訳したこともない「コリントI」7：20の“Beruf”という訳語にルター自身が影響されて「ベン・シラの知恵」11：20、21をも“Beruf”と訳すに至つたということも、どう逆立ちしても有り得ぬこととなる。もしもその場合にもヴェーバーの主張に従おうとするならば、「ベン・シラの知恵」11：20、21は“ruff”でなければならぬこととなる。よつてヴェーバーの主張は成り立たぬ。

更に、「箴言」と「ベン・シラの知恵」とがそれぞれルターによつて翻訳された時期の時間的前後関係に依拠したアポリアの回避のためのヴェーバーの立論、これも残念ながら成り立たぬ。ヴェーバーが主張した時間的前後関係が成立するのは、我々が初版年代に目を奪われている限りにおいてのみなのである。しかしながらルターが絶えず己の訳に手を入れ続けていたこと、より適切な訳を求めて死に至るまで絶えず聖書を改訂し続けていたことは、これもまた余りにも有名な事実である。ここでヴェーバーが見落としたのは、初版後のルター自身による改訂作業である。先ず「箴言」、次に信仰が深まつてから「ベン・シラの知恵」というヴェーバーの主張した時間的前後関係は、ルター自身による改訂作業をも視野に収めるならばこの順序では維持され難いのである。ルターにとつてより大切であつたのは旧約外典に属する「ベン・シラの知恵」などではなく、旧約正典に属する「箴言」の方であつた。従つてルターは「ベン・シラの知恵」が出版された後にも「箴言」を改訂していた。勿論「ベン・シラの知恵」の方も改訂している。しかし彼は重要なもの程後々の時期に至るまで改訂を繰り返しているのである。ルターによる「箴言」の最終改訂は一五三九／四一年であり、他方「ベン・シラの知恵」の最終改訂は一五三四年、遅く見積もつても、ひよつとしたら一五三九／四一年にもやつていたかもしれない。とまでしか下らぬ。即ち、改訂作業をも視野に収めるならば、その時「箴言」と「ベン・シラの知恵」との時間的前後関係はヴェーバーの主張とはさかさまになつてしまふか、或いはせいぜいのところ同時期になつてしまふのである。もしも同時期であるとするならば、ルターは「箴言」22：29は“Geschäft”で、「ベン・シラの知恵」11：20、21

は“Beruf”でそれぞれ訳し分けていた、即ち、「箴言」22：29は“Geschäft”でよかつたということなのであり、またもしも時間的前後関係が逆となるとするならば、そして尚且つその場合にも時間的に後に来る訳語をこそより重視すべきであるとのヴェーバーの主張をそこに適用すると言ふならば、我々は“Geschäft”という訳語をこそ重視しなければならなくなるのである。従つて、いずれの場合にもアポリアの回避のためのヴェーバーの立論は崩れることとなる。

ヴェーバーの「職業としての学問」によつて学問に対する態度を教えられ、またヴェルトフライハイトの主張によつて事実への態度を学んできた我々としては、今ヴェーバーに向かつて次のように問い掛けてみたくなる。「現代の普通の版における」という但し書きを付した時、貴方はその箇所をルターが“Beruf”とは訳していなかったことを御承知だつたのでは？と。勿論答えは返つては来ない。「現代の普通の版」でルターの訳語の変遷を辿ることは、与謝野源氏や谷崎源氏をテキストとして用いて紫式部の言葉遣いを研究することに等しい。現代の普及版ルター聖書を用いてルターの聖書翻訳における訳語の変遷を論じることが可能であると、あの明敏なヴェーバーが本心に思つていたのであろうか？同じ“Beruf”に関する注の内ヴェーバーは、自分はハイデルベルク大学図書館所蔵の古版本を全て調べたと述べている(Archiv: 38; HS: 68; 大塚訳一〇二頁；梶山訳・安藤編一〇二頁。傍点引用者)。ハイデルベルク大学の古版本を全て調べ上げることの出来るその同じ人物が、その一方でルター自身によるルター聖書を参照することは出来なかつたのであろうか？当時ルター訳聖書の厳密な校訂版はいくらも出ていたことを我々は知っているのであるが、。問い質したい疑問はいくらも湧いてくるが、無論答えは返つては来ない。それらの疑問を確かめるすべも我々はもはや持つてはいない。

我々は確実な答えを得られる部分のみに問いを限定することにしよう。フランクリンの二つの文章から「資本主義の精神」の理念型を構成する部分である。先に我々は、大塚久雄は正しかった、と述べた。ヴェーバーが

「宗教的なものへの直接的な関係を全く失っている」と言い切ったフランクリンの文章を、大塚は「まだまだピエウリタニズムないカルヴィニズムの思想的残存物がいっぱいつまっています」と解説してしまつたのであるが、ではなぜ大塚は正しいのか？それは大塚がフランクリンの原典に当たつていたからである。原典に当たつた大塚は、ヴェーバーが引用に際し削除していたフランクリンの文章を読んでしまったのである。「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」と題された彼の論文の中に、ヴェーバーの言う「資本主義の精神」というのは「何よりもまず、勝れた意味において一つの『エートス』として捉えられていること」、また「それだけに止まらず、そのうちには、われわれが『倫理』とよんでも何らの的はずれも生ずることのないような諸徳性もまた、はっきりと含まれているということ」を主張した上で、そうしたことを「いっそう明瞭ならしめるため」の恰好の文章として、フランクリンの文章を大塚自身が紹介しようとする部分がある。大塚久雄による紹介部分のフランクリンの文章を見ればすぐに判るように、確かにそれは大塚久雄の言うように「資本主義の精神」のエートスの性格を見事に表してくれているフランクリン自身の手による文章である。にもかかわらず、この折角の恰好の文章をヴェーバーはフランクリンからの引用部分で引用しなかつた。ヴェーバーが引用していないということ、そしてなぜよりもよつてこんな恰好の文章をヴェーバーが引用しなかつたのか、その奇妙さを大塚久雄は漠然とであるが感じていた。但し、ヴェーバーがなぜこの部分を引用するわけにいかかつたのか、なぜ削除しなければならなかつたのか、その理由までは彼には思い浮かばなかつた。そして、思い浮かばぬままに「ヴェーバーはどういうわけか自分の引用文ではこの部分だけを省略している」<sup>(17)</sup>のだが、という彼自身の困惑を微かに示す但し書きを付しながら、次のように引用したのである。以下はヴェーバーによつて省略されたフランクリンの文章の、大塚自身の訳による引用である。

「要するに、富裕にいたる道は、君が求めさえすれば、市場へいく道と同じくらいはつきりしている。それは主として、勤勞と質素、この二つの言葉にかかつている。つまり、時間と貨幣を浪費せずに、二つともできる限り善用したまえ。勤勞と質素がなければ何事もだめであり、それがあれば、総てがうまくいくだろう。正直にして得られるものは残らず手にいれ、得たものは残らず節約する（必要な支出は別として）人は、必ず富裕となるだろう。——世界を統べ治め、正直な努力によつて祝福を求める者の願いを聞きたまう神が、ほむべき摂理のうち、それと異なる予定をなしたまわぬかぎりは。」

ヴェーバーがなぜこの部分を引用するわけにいかかつたのか、なぜ削除しなければならなかつたのか、その理由は今や我々には判る。右引用部分のうち、我々が傍点を付した部分は一体何のことを述べているのであろうか？もし世界を統べ治めたまう神がそれと異なる予定をなしたまわぬかぎりは、君は総てがうまくいき、必ずや富裕となるだろう、とフランクリンは述べる。では、もしも神がそれと異なる予定をなしたまわれるとするならば、その時君はどうなるのか？その時君はたとえいくら努力したとしても決してうまくゆかぬであろう。君がたとえいくら勤勞と質素に努め正直にしていたとしても、もしも世界を統べ治めたまう神がそれと異なる予定をなしたまわれたとするならば、君は決してうまくゆかず、富裕にもなれぬであろう、なぜなら君は永遠の昔から滅びへと定められていたのだから……というこの無慈悲で恐るべき神とは一体いかなる神なのか？これこそ予定説の神ではないのか？ヴェーバーはこともあろうに、フランクリンの文章中の予定説の神への言及部分<sup>(18)</sup>を讀者には隠し、前もつて削除した上で、「宗教的なものへの直接的な関係を全く失つており、それ故……『無前提的』である」という長所を示してくれている「ような恰好な記録としてフランクリンの文章を讀者の前で引用して見せ、それを基にして宗教性の残滓をよはやく欠いたものとしての『資本主義の精神』の理念型を造り上げていたのである。

大塚久雄は知つていた。フランクリンの文章中に、それも「どういふわけか」ヴェーバーによつて省略された

部分に「ビュウリタニズムないしカルヴィニズムの思想的残存物がいつまいつまいついていくことを知っていたがゆえに、彼は「訳者解説」にそのことを書いてしまったのである。それは大塚の「誤読」ではなく、彼の功績なのである。大塚久雄は正しかったのである。しかし彼はその道をそれ以上突き進むことが出来ない。ここまですべていたにもかかわらず、ここまで核心部分に近づいていたにもかかわらず、どういうわけで、ヴェーバーがその部分を削除したのか、いかなる必要があつてわざわざ削除したのか、そのことをそれ以上追究することは出来ない。「どういうわけか…」と一瞬微かに困惑するだけで、やがてその疑問は大塚の手から滑り落ちてしまう。自らの素朴な疑問を飽くまでも握り締め、逆にヴェーバーの方をこそ疑ってみるということが彼には思い浮かばない。自らの馬鹿げた疑問を捨て切れずに、逆に愚かしくもヴェーバーの方をこそ疑ってみることに無礼さが彼には欠けていた。ヴェーバーは自分よりも偉大であり、ヴェーバーのやつたことに間違いがある筈はない……。この思い込みが、研究者としての発見のチャンスが大塚久雄から奪つたのである。

今一度ヴェーバーの言葉に戻ろう。ヴェルトフライハイトとは己にとつて不快な事実をも事実として認めること、ただそのことに過ぎない。そして更に学問とは、たとえそれがどのような偉人が主張したことであれ、凡庸にしかならぬであろうこの自分の頭で今一度考え直してみることに、党派に群れることなく、自らの素朴な疑問を周囲への顧慮の故に棄てることなく、不遜であるとの非難に抗しつつ、とにかく今一度自分の目で事実を確かめてみることに、それが学問の出発点である筈なのである。そうした態度が当たり前のものと認められるようになった時初めて、我々はヴェーバーの呪縛から解放され、彼が残してくれたものをとらわれぬ態度で研究することが出来るようになるであろう。

なぜならそれを我々は他ならぬヴェーバーから学んだのであるから。<sup>(19)</sup>

## 注

(1) とは言うものの、筆者自身にとつては各領域の専門家の方々の御助力なしには「倫理」論文のこの部分を解説することは全く不可能であつた。フランクリンに関しては東京大学名誉教授斎藤藤光氏に、英訳聖書に関しては東京大学名誉教授寺澤芳雄氏に、「ハン・シラの知恵」に関しては一橋大学教授土岐健治氏に、ルターに関しては東京大学助教授(当時)松浦純氏に、ヘブライ語に関しては東京大学助教授(当時)関根清三氏に、またギリシア語に関しては友人の東京理科大学講師(当時)高橋雅人氏に御教え頂いた。但し本稿に誤りがあつた場合の責は全て筆者に帰する。また、資料の収集に当たつては東京大学文学部図書室矢島秀夫図書主任(当時)、司書の梅沢耕助氏、浜田すみ子氏に多大な御尽力を頂いた。尚、本研究の経費の一部は東京大学文学部「布施記念学術奨励費」及び「財団法人 松下国際財団」よりの研究助成によつて賄われたものである。

(2) 以下では「倫理」論文と略し引用に当たつては頁数のみを本文中に記した。使用したテキストとその略号は次の通り。

Archiv: Die protestantische Ethik und der „Geist“ des Kapitalismus, in: Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 20. Bd., Heft 1, S. 1-54; 21. Bd., Heft 1, S. 1-110. (本稿ではその大部分が 20. Bd. 47 の引用であり、21. Bd. 47 の引用の時のみ Archiv, 21. Bd. と記した。)

RS: Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, in: Gesamte Aufsätze zur Religionssoziologie I, 6., photomechanisch gedruckte Aufl. Tübingen 1972 (zuerst 1920).

本稿では改訂時の加筆・削除・表現の変更を「Archiv」版にはあつたがRS版では削除された部分は「<」で「Archiv」版にはなかつたがRS版では加筆された部分は「>」で、また「Archiv」版での元の表現がRS版では変えられた部分は「元」の表現をその直後に「Archiv」<として示した。尚、訳文は本稿での議論の性質上「ヴェーバー」の原文に出来る限り即した直訳を試みた。但し既存の邦訳はその都度参照し、裨益させて頂いた。また読者の便宜を考え原典の頁数だけではなく、現行の岩波文庫版の大塚訳、及び、梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(未来社・一九九四年)の頁数を同時に併記した。引用文中の傍点並びにイタリックは特に注記のない限り全てヴェーバー自身によるゲシュェルトの部分を示す。引用文中で文意を考慮して筆者が補つたものは「=」と記した。

またヴェーバーの他の著作からの引用に当たっては以下の略号を用い、やはり頁数のみを本文中に記した。

- Wl. Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 6, erneut durchgesehene Aufl. hrsg. von Johannes Winkelmann, Tübingen 1985.
- (3) Marianne Weber: Max Weber. Ein Lebensbild, Tübingen 1984, S. 351. 大久保和郎訳『マックス・ヴェーバー』(みすず書房、一九七〇年)一・二六六頁。
- (4) ここで手札とは資料のことを指す。ヴェーバーが用いた資料にまで遡って「倫理」論文における彼の論証の妥当性を検証する試みは我が国においては既に伝統がある。バクスターに関しては越智武臣「近代英国の起源」(ミネルヴァ書房、一九六六年)、ウエズリに関しては岸田紀「ジョン・ウエズリ研究」(ミネルヴァ書房、一九七七年)を参照。
- (5) 金井新二は「倫理」論文末尾におけるヴェーバーの言葉を引きつづ——それはこの「因果関係のただ一つの側面」という「宗教社会学論集」の「序言」におけるヴェーバーの言い方とも関連するものである——次のような興味深い議論を展開している。仮に先ず因果関係の半分だけが敢えて自覚的に取り出されたとしよう。そして次に同じ事例から、今度は経済的制約性という観点の下に逆の因果関係が取り出されたとしよう。「しかし、その後で、この二つの因果関係は一体どのようにして合体させられるのだろうか。そのような手続きは考えることが出来ない。」(金井新二「ヴェーバーの宗教理論」東京大学出版会、一九九一年、一一四頁)
- (6) 一九一九年から一九二〇年にかけて「倫理」論文に大改訂がなされていたことを世界で最初に発見したのは安藤英治であった。一九六八年に発表された彼の改訂一覧表(「M・ヴェーバーの宗教社会学改訂について」『成蹊大学政治経済学論叢』第一八巻、第三・四合併号)が当時海外に発表されていたとするならば、我が国のヴェーバー研究はその時点で既に世界的評価を得ていたであろう。
- (7) Luitpold Brentano: Die Anfänge des modernen Kapitalismus, München 1916, S. 131. 田中善次郎訳『近世資本主義の起源』(有斐閣、一九四一年)一七四頁。但し、ブレンターノ自身は宗教性に関してではなく、ヴェーバーが「資本主義の精神」を定義するに際して、当初より倫理的色彩を帯びたもののみに限定したことを指して「不当前提」と非難したに過ぎない。宗教性に関する不当前提がここに潜んでいること、ブレンターノ自身は遂に気付くには至らなかった。ブレンターノやサムエルソン(Samuelson)に代表される従来の「資本主義の精神」に対する批判が何故無効であったかについては、一九九四年一月に東京大学大学院人文科学研究科に提出され、一九九五年三月に学位授与された筆者の博士論文「Quellenbehandlung Max Webers in der „Protestantischen Ethik“」の第三章「Der „Geist des Kapitalismus“」, Anm. 16を参照された。
- (8) 改訂に際しヴェーバーは「冒頭の「財産」を「資本」に書き換え、更にこの部分全体の直前に「信用ある紳士という理想、そしてとりわけ」という言葉を付け加えた。後者の加筆は「資本主義の精神」の理念型を元々のフランクリンの文章内容により沿った形のものにするためのものであったと思われるが、この加筆自体は、改訂後の「倫理」論文におけるヴェーバーの議論全体に対して何らの影響も与えていない。よって、教えてこの改訂前の表現に従って引用した。(RS: 33; 大塚訳四三頁、梶山訳・安藤編九二頁を参照。)
- (9) ルターの聖書翻訳によって生み出された「Beruf」という訳語がプロテスタント諸民族の国語の内に受容され、それぞれの国語の内に「Beruf」に相当する語を生み出したのであると「ネウジタもの」のひととして英語における「calling」を挙げ、ヴェーバーの主題は成文化された。Zeitschrift für Soziologie 27掲載された著書「Max Webers Quellenbehandlung in der „Protestantischen Ethik“——Der Begriff „Calling“——」(Jg. 22, Heft 1, 1993, S. 65-75) 改訂後の詳細は、前掲博士論文の第一章「Der Begriff „Calling“」を参照された。
- (10) この部分邦訳では単数で訳されてきているが、... der Übersetzer「は複数二格であり、従って、複数の翻訳者達のことを述べていることになる。斎藤光「フランクリンとマックス・ヴェーバー」(『明星英文学』第二号、一九八七年、七五頁)に負う。
- (11) フランクリンの「自伝」のこの部分の叙述の流れからすれば、貨幣の獲得こそが「Beruf」における有能さの表れであり、ネウジタ「Beruf」における有能さがフランクリンの道徳的真髓なのである、などと断定するには無理がある。J. A. Leo Lemay & P. M. Zall ed., "The Autobiography of Benjamin Franklin. A Genetic Text", Knoxville 1981, p. 75. 鈴木慎一・西川正身訳『フランクリン自伝』(岩波文庫、一九八七年)一三三頁を参照。
- (12) フランクリンの父ジョサイアを「厳格なカルヴィニスト」であったとするのも「自伝」の叙述からして無理がある。



- (13) フランクリンの「自伝」におけるヴェーバーによる「啓示Revelation」という語のコンテキストの読み誤りの問題に関しては、より詳しくは、前掲博士論文第三章「Der Geist des Kapitalismus」, S. 67以降を参照。
- (14) 本稿で扱った「資本主義の精神」に関する議論に関しては、より詳しくは、前掲博士論文第三章「Der Geist des Kapitalismus」, S. 51以降を参照。紙幅の都合上、本稿ではかなり議論を簡略化している。
- (15) 筆者の管見の限りでは、この注の持つ重要性に気付いているのは青藤、前掲論文(七五頁)のみである。青藤は更に、ヴェーバーがフランクリンの「自伝」の独訳のみに頼り、原文を参照していなかった可能性をも、「邪推」という言葉によって——かなりの範囲を極めた慎重な権威を張りながら——仄めかしている。「古く英訳聖書は“business”と述べるのみで、フランクリンが問題の箇所を“Calling”で引用してくれていたという自らの立論によって極めて好都合であった筈の事実」にヴェーバーは全く言及していぬ。その奇妙さから見ても、あなたが青藤の勝手な「邪推」とは言い切れぬ重要な指摘である。
- (16) 紙幅の都合上、Beruf.に関する論証に本稿で詳しく触れることは出来なかった。より詳細な論点に関しては、上掲博士論文の第二章「Der Berufs-Begriff」, S. 26以降、或はArchives européennes de sociologieに掲載された拙稿「Max Webers Gellenbehandlung in der Protestantischen Ethik. Der Berufs-Begriff」(Vol. XXXV, n. 1, Mai 1994: 72-103: Cambridge University Press) または拙稿「マックス・ヴェーバーの『魔術』からの解放——「倫理」論文における、Beruf.概念をめぐる資料操作について——」(「思想」一九九八年三月号、七二—一一頁)を参照された。
- (17) 「大塚久雄著作集第八巻 近代化の人的基礎」(岩波書店、一九七〇年)三九頁。
- (18) ここで描かれているのは予定説の神であるが、但しフランクリン自身が予定説の信奉者であったわけでは勿論ない。Franklin, op. cit., p. 76. 「自伝」一三三頁を参照。
- (19) 本稿が最初に脱稿された一九九三年六月当時、大塚久雄氏はまだ御存命であった。氏が健康を害されて臥せっておられることを筆者は人伝てながらに伺い、存じ上げていた。フランクリンの文章の一部をヴェーバーがなぜ削除したのか、大塚氏がその意味をずっと気にされ繰り返し繰り返し論文に書かれていたことを知っていただけに、筆者としてはこの拙稿を

他のどなたよりも生前の氏に御見せしたかった。研究者というものは一種の狼犬である。自分が引つ掛かった部分をずっと気に留めていて、気が付くとその周りをいつの間にかぐるぐると回っている。自分の感覚が正しかったのか、それとも見当外れであったのか、それを最後まで確かめたい、せめて自分が死ぬまでに知りたいと思うのが研究者特有の——言わば哀しい——業である。氏の勘が正しかったことを、筆者としては氏が御元氣なうちに御伝えしたかった。しかしこの原稿は、奇妙なことに諸般の事情により、こうした形で活字になるまでに五年間の歳月を要した。その五年の間に、氏は亡くなられた。急がなければ人は死んでいく。急がなければ一度は発見された事実もまた砂に埋もれるように消えてゆく。大塚学派・反大塚学派などという色分けなど、そうしたことに比すれば瑣末なことに過ぎない。人がどうという学派に属しよう、学問は所詮事実でしかなく、事実というものは人がどの学派に属しようと変わらない。そして事実というものを持つ恐ろしさは、それを人の側が認めたがるか認めたらぬかなどということには一切関わりなく、認めたくない人間に向かってもまた、ただひたひたと追ってゆくだけのことであるということにある。認めたくない事実の一端にひとたび気付いてしまうと、ひとたびスイッチが入ってしまうや否や、その後は当人の頭の中で崩壊のプロセスの論理的進行が自動的に開始されてしまう。あとは演算をするのは本人自身の頭脳である。頭脳明晰で優秀な人間ほど、その解体のプロセスの速度はだから速くなる。優秀なコンピューターほど、いったんウイルスに感染するとプログラム崩壊のスピードが速いようなものである。何が起こったのか分からぬままに幸運にもそこで取り残されていくのは、演算速度の違いコンピューターである。こうしてくっきりと一つの後線が引かれていく。分かってしまう者と分からぬ者との。自分の頭脳の中で認めたくない事実に取り囲まれ、押し潰されてゆく優秀な人間達の悲鳴が聞こえる。「貴方は我々をどこへ連れて行くと言うのか?」ドイツの或る老大家のヴェーバー研究者はそう書いてきた。「ヴェーバーは狡いよ……」。一生をヴェーバーに捧げた或る日本のヴェーバー研究者は、私の前で堪らなくなつたように呟いた。暗い喫茶店の中で、その方の表情だけが残った。ヴェーバーという夜ごと徘徊する死体に木の杭を一打ち一打ち打ち込んでいるような、無残なことをしていると、自己覚は筆者にはある。自分の手が血で汚れているという自己覚は筆者にはある。学問は自分が方向転換する際に、その曲がり角で押し潰されていく人間達の感情などを顧慮してくれない。一生を己に捧げてくれた人間達を平気で押し潰しながら、学問というこの女神は勝手に方向転換してゆく。そこに学問の持つ非情さがある。ヴェルトフライハイトとは何と

も酷いものである。